

燃える初秋のクラス対決

総合優勝は3の1



翠巒 Mini Press 第168号 2020/9/16

編集・発行 高崎高校新聞部

紙面紹介

- ・表面
- ・校内競技大会
- ・校内水泳大会
- 〈裏面〉
- ・文藝部
- ・硬式野球部
- ・オンライン学校説明会

8月31日の午前中に校内水泳大会が、同日午後と翌日に校内競技大会が挙行され、選手一人一人がクラスのために出場競技で勝利を目指して戦った。また、本大会は9月25日に高崎高校(以下、高崎)で開催される第74回高前定期戦の選手選考を兼ねているため、プレーにも一層磨きがかかっていた。そこで今回は、各競技において特に活躍した選手や好成績を残したクラスに取材を行なった。

駅伝

競り合う選手たち



校内競技会の駅伝では、2の2が優勝した。そこで、最終走者の堤悠斗くん取材を行なった。

駅伝で優勝した感想について、「まさかという一言につきる。自分の前走者から、10番くらいでたすきを渡すと事前に言われていた。そのため1番でたすきを渡された時は大きなプレッシャーがかかった。しかし、その分、1番でゴールできた時の喜びは大きかった」と話した。

駅伝で役立った練習については、「練習というわけでもないが、ほとんど毎日取り組んでいるのは、位置情報を利用したスマートフォンゲームをやりながら、4〜5キロほどランニングをすること。自分が好きなことをやりながら走れたので、続けられた」と語った。(石井)

ソフトボール

ソフトボール決勝は、3対2で1の4が競り勝つ結果となった。本試合は、豪速球を投げるピッチャーとして注目を集める高橋(正式には旧字体)拓也くんを擁する1の4と、堅い守備と強力な打線を武器にする3の3との激しいものだった。

試合が動いたのは2回表、3の3が遂に投手のボールを捉え、その後も3の3は着実に点を重ねた。しかし、3回裏に2点ピバインドを負った1の4が、この試合の決定打となる3点タイムリーを放ち、1の4が逆転勝利を果たした。

1の4優勝の立役者である高橋くんは、「常に仲間の守備を信じ、安心して投球することができた。みんなで勝ち取った優勝なので素直にうれしい」と語った。(新井)

玉入れ

3F池前と翠巒会館とで行なわれた玉入れは、3の2・4が決勝で3の1・5・6を2対0で下して、優勝した。また、3位決定戦では、2の2・6・7が接戦を制した。今年、経験が浅い1年生が3年生を相手に1ゲームを先取り、延長戦に持ち込んだ。敗れこそしたものの大健闘であった。

優勝した3の2・4の選手

バスケットボール

大会2日目、3の1と1の2とが、第二体育館でバスケットボールの決勝戦に臨んだ。結果は、3の1の勝利だった。両チームの磨かれたプレーに差はなく、決勝戦は終始互角の戦いとなった。試合中には、「もっと走れ」、「点取られるぞ」といった厳しい声が響く一方で、「ナイス」、「この調子でいこう」といった激励の声も聞こえるなど、勝利への執念が見受けられた。両者譲らない試合展開であったが、第2ピリオド目で点を重ねた3の1が勝利した。

優勝に貢献した吉田謙心くん(3の1)は、「昨年と同じメンバーだったので、チームワークは大丈夫だと確信していた。勝利できたことは本当にうれしい。最高のチームという言葉に尽きる」と喜びを噛みしめた。(中澤)

想を語った。(小松)



一斉に玉を投げ入れる選手

た。いずれのレースの結果も僅差であり、白熱した戦いとなった。そこで今回は、3年50m自由形優勝かつ校内タイムトップの櫻井拓実くん(3の3)と、1年50m背泳ぎ、50mバタフライでダブル優勝を遂げた桑原徹成くん(1の5)に感想を聞いた。

櫻井くんは、「自己ベストを目指して出場したため、良いタイムで終えられてうれしい。校内1位になったことに驚いたが、小学生の頃から重ねてきた努力の成果を發揮できた」と喜びを口にした。また、「定期戦では自分の出場する種目で力を尽くし、高次の勝利に繋げたい」と定期戦への抱負も語った。

続いて桑原くんは、「小学校4年生の頃から水泳を習っていたため、練習時間が少ない中でも思い描いた結果を残せた。その後に開催される校内競技大会に向けて、クラスに勢いをつけようという取り組みだったので、自分がイメージしていた役割を果たすことができうれしく思う」と熱い想いを語った。(矢野)

懸命な泳ぎで仲間を鼓舞 優勝は3の2



力強く泳ぐ背泳ぎの選手

今年度の校内水泳大会は、4泳法につき各25m、50mの計8種目で行なわれた。

1年50m背泳ぎ、50mバタフライでダブル優勝を遂げた桑原徹成くん(1の5)に感想を聞いた。

櫻井くんは、「自己ベストを目指して出場したため、良いタイムで終えられてうれしい。校内1位になったことに驚いたが、小学生の頃から重ねてきた努力の成果を發揮できた」と喜びを口にした。また、「定期戦では自分の出場する種目で力を尽くし、高次の勝利に繋げたい」と定期戦への抱負も語った。

続いて桑原くんは、「小学校4年生の頃から水泳を習っていたため、練習時間が少ない中でも思い描いた結果を残せた。その後に開催される校内競技大会に向けて、クラスに勢いをつけようという取り組みだったので、自分がイメージしていた役割を果たすことができうれしく思う」と熱い想いを語った。(矢野)

NOTE

「勝手にしなさい」と誰かに言われたらどうするだろうか。もし、勝手に振舞ったら「命令に従っている」という状態になる。勝手に振舞ってはならない。反対に、命令に背いて勝手に行動しても、それは勝手でないことになってしまう。このような状況をジレンマという。これは、両立しない二つのことの間で挟まれて、身動きが取れない状況に苦しむことである。実はジレンマは、この世の中に多くあふれている。ここでは、代表的な二つのジレンマについて説明したい。まず、「安全保障のジレンマ」である。どんな国でも、優れた安全保障政策を進めようとすると、結果的には、他国と軍事的同盟を結ぶことになる。それによって、同盟を結んだ国が対立する国と緊張がさらに高まってしまいうため、むしろ安全ではなくなる。「対立」がある限り、「安全」はなかなか叶わないものだ。次に、「ゼネラリストのジレンマ」である。ゼネラリストはスペシャリストの逆で、多分野に知識を持っている人である。それになるためには、ゼネラルシンキングを身につけなくてはならない。つまり、その考え方のスペシャリストにならなくてはならないのだ。しかし、このことは、ゼネラリストになることに矛盾する。結局は、対義関係にあるスペシャリストになるのだ。このコラムでは自由な執筆が許されているが、それに従って書いた私は不自由である。すなわちこれは「NOTE」のジレンマである。(中澤)

「一年間の成長を出しきれた」 俳句甲子園 個人入賞



入選した本城くん

8月23日、第23回俳句甲子園（全国高等学校俳句選手権大会）の結果が、YouTube上で発表された。高高としては初の全国大会出場となる。その大舞台で、本城翔音くん（2の1）は、「冷奴心が抜けた やうな月」という句で入選を果たした。大会に出場した大橋弘典くん（3の7）、北村大希くん（3の6）、武元気くん（2の5）、小倉璃久くん（2の7）、本城くんは、投句を終え、結果を待つ間の心境を語った。

武「ハイレベルなディベートを見ることができず、醍醐味がなくなってしまう」
北村「ディベートが苦手なのでありがたかった」
兼題「冷奴」「蚯蚓（みみず）」「緑蔭」「朝」
小倉「『蚯蚓』の句は200×300句作って、やっこのことで納得のいく句が1つ完成した」
武「『冷奴』の句を作るために、豆腐をたくさん食べた」
手応えは、
大橋「1年間の成長を出しきれた」
また、結果が発表された後の率直な気持ちを聞いた。

北村「チームとしての結果が残せなかったのは残念」
入選句「こころ」
本城「俳句を作って疲れきった自分の姿と、そのとき見えた月の様子が重なり、『心が抜けた』ように思えた」
大橋「チャンス積極的に活かして、たくさん壁にぶつかりにいってほしい」
（2年生）今後の目標は、
一方、日本労働組合総連合会（JTUC）によるテレワークに関する調査2020によると、

オンライン学校説明会 「高高らしさ」どう伝えるか

高高では、中学生を対象とした学校説明会が毎年8月に行なわれるが、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。そこで、群馬県教育委員会からの要請もあり、代替案として、ホームページに学校紹介の動画を掲載し、オンラインで学校説明会を実施している。

動画は20分ほどの映像やスライド、ナレーションを組み合わせた形式で、学校長挨拶、生徒会長挨拶、学校概要・入学試験の説明、学校行事の紹介という構成になっている。制作にあたった大久保泰希先生は、「あまり長くなりすぎないよう、高高の良さが最低限伝わる内容にした。生徒会長の挨拶や生徒会総務による学校行事の紹介を通して、『生徒主体の学校運営』という高高の大きな特徴を、少しでも感じてもらえたらうれしい」と話す。さらに、「時間や場所を選ばず、何度も見られるのが動画の良い所だと思う。そのため、より集中してもらえて、伝えたいことが確実に伝わるはずだ」と動画をjめるメリットを挙げた。

一方で、「例年通り中学生が高高に来て、先輩たちの雰囲気や『高高らしさ』を肌で感じる事ができないのが非常に残念だ。また、時間の制約もあり、生徒が『文武両道』を実践している姿を動画に取り入れることができなかった。授業風景や部活動の様子を組み込むなどすれば、もっと高高の特色を知ってもらえたかもしれない」と述べ、慣れない形式への戸惑いや動画の問題点を少なからず感じているようだ。

最後に、「このような形になってしまったとはいえ、高高に魅力を感じた中学生には、高い志を持って入学してきてほしい。我々もその思いに精一杯応えたい」と受験生にエールを送ると共に、未来の高高生に期待した。（都木）

論説

リモートの普及とこれから

先日、高高の文藝部が出場した第23回俳句甲子園の結果発表がYouTubeでのライブ配信を通して行なわれた。

最近のテレビ番組では、「リモート」という言葉をよく耳にする。パソコンなどを用いて自分と相手とを繋ぎ、やり取りをすることだ。これまでは主に、離れた事業所との会議などに使われていた。しかし、現在ではリモートの多用途化が急激に進んでいる。

リモートの拡張は、企業に大きな革新をもたらした。社員の在宅

勤務や、取引先との商談のオンライン化がその例だ。それらは、社員通勤時の満員電車などのストレスをなくしたり、商談に向く際の手間や時間をなくしたりするなどの多くの利点がある。

「勤務時間とそれ以外の時間の区別がつけづらい」というテレワーク率は44.9%にも上る。その

悔しいけれど 野球代替大会

5月20日、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、全国高等学校野球選手権大会、通称「夏の甲子園」の開催中止が決定された。それにより、各都道府県独自の代替大会が開催され、全国の高校球児は

代替大会での優勝を目指して戦うこととなった。我が校の野球部も、7月18日から8月10日にかけて開催された、2020年群馬県高等学校野球大会に出場した。

1回戦の中央中等との試合は3対1の快勝を収めた。1・2・5回に1点ずつ得点し、高高のペースで順調にリードを広げた。そして、失点を1点に抑え、そのまま逃げ切った。しかし、2回戦の常盤高校との試合は1対11、5回コールドの大敗を喫した。4回裏に6点の先制を許し、5回表に1点を返すものの、流れを変えられないまま5点を失った。試合は終了した。

硬式野球部部長の高安くん

最後に、「甲子園出場を目指して、これからも頑張っていくので、応援してもらえたらうれしい」と高高生へ呼びかけた。硬式野球部は、秋季関東地区高校野球群馬県大会へ向け、練習に励む。（根岸）

